

イサザ資源の現況把握調査（2022年）

大前信輔・佐々木賀治

1. 目的

イサザは、琵琶湖漁業の重要な漁獲対象魚種であると同時に、資源量が大きく増減することが知られている。このため、産卵のために接岸してきた親魚期と着底した稚魚期の資源状態を評価することを目的として調査を行った。

2. 方法

親魚調査はドーム状籠網（直径73cm、高さ68cm、網目1.8cm×1.8cm（底面のみ0.9cm×0.9cm））を用いた。これを水産試験場船溜まりに4つ設置し、2022年3月2日から5月26日にかけて約1週間に1回の頻度で引き揚げ、採捕された尾数を記録した。稚魚調査は2022年7月7日と7月22日に水深20mの彦根・長浜地先で小型沖曳き網を用いて行った。

3. 結果

親魚調査で採捕された採捕数は3月16日に最大値（28.5尾/籠/日）となった。その後、4月20日には10尾/籠/日を下回り、5月12日以降は採捕されなかった（図1）。

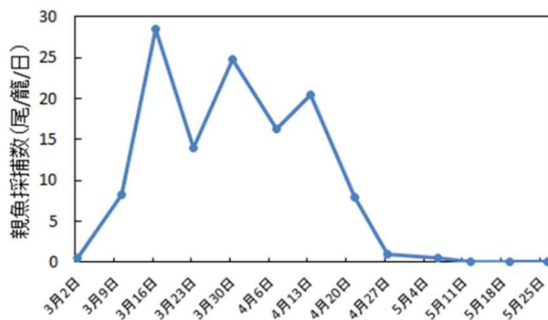


図1 2022年の採捕数の推移

4月平均採捕数は当年エリ CPUE およびイサザの主要産卵場である海津での産卵量と

文献1) 大前(2021年): 水産試験場船溜まりにおけるイサザ親魚モニタリングデータの評価 令和3年度滋賀水試事業報告

の間に相関が認められる¹⁾。そこで、2009年以降の過去の値と比較した。2022年は11.4尾/籠/日となり、前年より増加したものの依然として低水準であった（図2）。

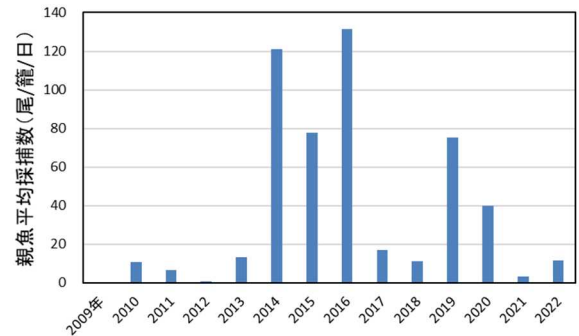


図2 親魚の4月平均採捕数の経年変化

稚魚調査で採捕された稚魚数は20.0尾/曳であった。前年と同水準であり、2020年以降低水準が継続した（図3）。

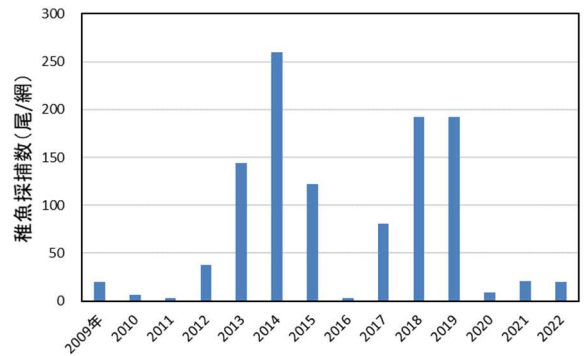


図3 稚魚採捕数の経年変化

以上のことから、2022年の親魚と稚魚の資源状態は総じて低水準にあったと考えられた。